

大学の図書館

第42巻第2号 (No.591)

2023 2



目次

続いていること・進んでいること・立ち止まったままのこと 小林 泰名 ... 17

特集：足跡をたどる

 始めることと、続けること 岡本 真 ... 18

 印象に残る活動について
 (通常業務をちょっとだけ外れた?けれどやってきたこと) 鈴木 宏子 ... 20

 図書館利用者から図書館職員へ ある大学図書館員の回想 小山荘太郎 ... 22

 司書を勤めて十年強～モチベーションをイノベーション～ 石立 裕子 ... 24

 ジェネラリストの卵の遍歴 吉田 弥生 ... 26

続いていること・進んでいること・ 立ち止まったままのこと

小林 泰名

先日、この十年ほど関わっている仕事について振り返る機会があった。本学の障害学生支援部署であるアクセシビリティ支援室から、ピアサポート学生向けの研修で話してほしいと依頼があったのだ。本学では図書館とアクセシビリティ支援室が連携して障害学生への資料提供を行なっている。視覚障害・肢体障害など何らかの理由で紙の資料を読むことが困難な学生への資料電子化サービスは通常業務として定着しており、校正作業をピアサポート学生が担当している。OCRで読み込んだ資料の読み取りミスをチェックして修正する地道な作業だ。図書館にやってきて黙々と2時間程度作業する。障害学生への資料提供の一連の作業のうち一部分だけを担当していて、この作業が何の役に立っているのかわからずモチベーションが上がらないという声があり、このサービスの歴史と立ち上げ期の想いを語ってほしいという依頼があったのである。

「歴史」なんて大袈裟な、と思ったけれど、今、二十歳の学生さんは十年前は小学生だったわけで、そう考えるともう一昔前のことなんだなあ、と当手を振り返った。

立ち上げ期のことは他でも書いているのでここでは詳細は省くが、資料電子化には手間暇がかかり、当館だけで頑張っても到底、利用者の要望に応えきれないことは目に見えている。サービス試行段階から、機会を見つけては事例報告し、他機関と協力してサービスを提供したいと呼びかけてきた。現在、他機関との資料の共同利用はNDLの視覚障害者等用データ送信サービスで、相互利用はNIIの読書バリアフリー資料メタデータ共有システムで実現しつつある。十年もやっているのになかなか進まない!とやきもきすることも多かったが、改めて現状を確認すると、ゆっくりでも着実に進んでいることもあるのだなと思えた。一方で本学でのサービス提供の対象者を学生以外にも拡大することについては、今もまだ、これからの課題として残されている。

そんな話をして、ピアサポート学生さんたちにも、この業務が図書館の横の繋がりを通して世界中の利用者に役立ててもらえるものであること、意外と歴史は短く、まだまだ現在進行形のサービスであることを理解してもらえたようだ。

今号のテーマは「足跡をたどる」。それぞれ違う道を行く人の足跡をたどる面白さに満ちた特集になったと思う。お楽しみください。

(こばやし・やすな/北海道大学附属図書館)

特集：足跡をたどる

今号は多様な背景・視点を持つであろう会員個人のこれまでの歩みに着目しました。コロナ禍以降、飲み会のような「本務を離れた対面の場」が極端に減ってしまいました。諸経験や想いを、他者の語りで聞く機会が失われたことを「損失」と感じておられる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

今回5名の方に、ご自身のこれまでのできごとや職歴等を振り返っていただきました。それぞれの足跡をとともに辿り、ご自身にとっても振り返りの機会としていただけましたら幸いです。

(北海道地域グループ)

始めることと、続けること

岡本 真

これまでの歩みを振り返る：

正社員、パート、業務委託、経営者という遍歴

働き出して四半世紀が過ぎた。ここまでの来し方を振り返っておこう。

最初に就職したのは教育開発研究所という出版社だ。内定を得たのは卒業式直前の1997年3月上旬。就職浪人を真剣に意識した末の駆け込み就職だった。就職氷河期の初期のことだ。編集者を志望する私だったが、この就職は不本意なものであったし、こんなはずではなかったという思いがあった。結果、逡巡しつつも同社を1年で退職するに至った。

その時点では東京大学の日本史学科に学士入学するつもりで、研究生を始めた。とはいえ、働かないわけにもいかない。そこでフリーランスで細々と仕事を始めた。母校の先生方の縁で学術翻訳や学会開催事務等をしつつ、併行して出版社のウェブサイトを上昇させる仕事もした。ちょうどウェブが普及し始めたタイミングだった。

しかし、人生は思うようには行かない。当時の東大総長の方針で学士入学試験が見送られることになった。いつ再開されるかもわか

らないという。いきなり人生が追い込まれたように感じたものだ。再び本格的に働き出すことを決意したが、新卒1年で退職した人間に開かれている道はほぼない。ようやく見つけたのが日外アソシエーツでのパート求人。在籍は半年ほどだったが、パソコン通信からウェブへとオンラインデータベースの提供形態が変わる現場を経験できた。

次の職場は当時検索エンジンとしては、ヤフーに次ぐ存在の一つだったCSJ INDEXを運営するサイバースペース・ジャパンだ。ここでは業務委託としてiNETGuide（分野ごとに専門家をガイドとして立てるカテゴリ検索エンジン）の立ち上げに従事した。約半年を過ごした頃、iNETGuideのオープン直前に正社員として採用してくれる企業が現れた。

Yahoo! JAPANだ。まだ創業3年目で社員100名のベンチャー企業だったが、当面の居場所を得た。以来10年を過ごすことになる。10年のうち前半の5年はカテゴリ型検索にウェブサイトを登録・分類するサーファーという職種だった。そして後半の5年は社内で職種変更にも挑み、ウェブサービスを企画し、プロジェクトを牽引するプロデューサーに転じた。プロデューサーとして一貫して「調べ

る」ことを支援するサービスをつくったが、最大のヒット作がYahoo!知恵袋だ。やりがいと成果に恵まれていたが、10年を一区切りしようと思っていたこともあり、2009年、ヤフーを辞した。

そして興したのがアカデミック・リソース・ガイド株式会社 (arg) である。今年で創業14年目になるargでは、主に図書館のデザインとプロデュースを行ってきた。これまで手掛けた新図書館は10を超え、昨年は初めて大学図書館がオープンしている (駒澤大学)。

これまでの歩みを読み込む：

25年続くメールマガジンとともに育んだこと

転々としてきた四半世紀だが、その間の足跡を読み込むと見えてくるものもある。いま振り返ってみて気づくことを2つ挙げておこう。ただし、いま振り返って気づくことというのは、少なからず価値や意味をあと付けている部分があるので、割り引いて読んでほしい。

1番目は1998年にACADEMIC RESOURCE GUIDE (ARG) というメールマガジンを創刊したことだ。以来、多少の断続を挟みつつも、このメールマガジンを発行し続けており、今年で創刊25周年を迎える。発行回数は年内で1000回に迫る見込みだ。

「インターネットの学術利用」をテーマにしたこのメールマガジンは、研究者、次いで図書館関係者に支持され、私の世界を広げてくれた。大学図書館研究会、ダイトケンとのつきあいもこのメールマガジンに始まっている。ちなみにまだベンチャーだったヤフーが私に関心を示してくれたのも、このメールマガジンの存在が効いていた。一次面接に私を呼んでくれた最初の上司 (彼はいまは有名な作家である) が読者だったのだ。

メールマガジン ACADEMIC RESOURCE GUIDE (ARG) (週刊、部数4000～5000で推移) は創刊したことよりも、とにかく続け

てきたことが自分の来し方行く末に重要だと思っている。「インターネットの学術利用」から発して、いま社是とする「学問を生かす社会へ」へと至る私の彷徨いつつも、一貫した関心のあり様はこのメールマガジンのバックナンバーを見返せば明らかだ。ときおり5年、10年、15年、20年、25年前の私にバックナンバーを介して出会うことがある (ちなみに ACADEMIC RESOURCE GUIDE (ARG) はISSNを取得し、国立国会図書館にアーカイブされているので、私の死後も残るようになっている)。過去の自分の思想と行動が25年分も蓄積されているというのは貴重だ。過去の自分と出会い、自己内対話し、いまの自分を見返す装置があるわけだ。続けてきたからこそ残る価値がそこにはある。その意味で拙文の読後に来し方を振り返り、ぜひ日々の思いを記し残すことをお勧めしたい。必ず意味がある。

次いで挙げておきたいのが、メールマガジンでの活動を起点に幅広いネットワーキングがなされたことだ。その発端は創刊10周年の2008年7月に始めたARGカフェ&ARGフェストだろう (詳しくは関連論文を参照)。ヤフーを辞め起業することが視野に入っていたこともあり、意識して、自分が主として属する業界の内にも外にもネットワーキングを広げていった。IT業界内ではウェブプロデューサー勉強会を主宰し、ヤフーに限らずウェブ企業同士でフラットにまなび会える環境をつくった。そこで生まれた関係はいまもさまざまなプロジェクトを生んでいる。他方、メールマガジンを起点とした出会いから世界を広げてきた。いま思いつうだけでも、U40-Future Librarian (2009年)、マイニング探検会 (2010年)、Code4Lib JAPAN (2010年)、saveMLAK (2011年)、神奈川の県立図書館を考える会 (2012年) がある (括弧内は発足年。各活動については関連文献を参照)。

これらの活動に共通する特徴は、ウェブ(特

にSNS)を駆使して個と個のネットワークを促進し、さらには仕組み化したことだ。大仰に組織化するのではなく、しかし一定の活動を帯びたプロジェクトにしてきている。自分がいなくても続くプロジェクトにすることは、時間の経過とともに徐々に意識してきたことで、現時点ではますますの状態になっていると思っている。

メールマガジンという形で発信し記録し、そこから立ち上がる交流をプロジェクトという活動体にしていくこと。その際、自分がいなくても動く仕組みを心がけること。あくまで後知恵だが、こんな試行錯誤を続けてきたのが、これまでの足跡ではないだろうか。

正直、これが正解なのかはわからないし、わかる日は来ないように思う。結局、本人自身に悔いがなければそれでいいのだろう。その意味では私にとって、ここまでの足跡は振り返って反省するところはあるけれども、悔いはない。あのとき、メールマガジンを創刊した25年前の私に自分自身、心から感謝している。

(おかもと・まこと／

アカデミック・リソース・ガイド株式会社(arg)
mokamoto@arg-corp.jp)

印象に残る活動について (通常業務をちょっとだけ外れた？ けれどやってきたこと)

鈴木 宏子

自分の足跡や仕事への取り組み方を振り返ってほしいという依頼をいただいた。これといった一貫した信念もないので、期待に応えられるかどうかかわからないが、よい機会なので自分に関わってきた印象に残る活動について振り返ってみることにしたい。

まず北海道大学利用支援課在職時のことである。その担当業務と関連しながらも課外活

動のように行っていたのが、ビブリオバトルであった。ちょうどビブリオバトルの創成期である。北大の中でもビブリオバトルをサークルとしてやりたい学生たちがあり、図書館も学生協働の一環として彼らを支援し学内でビブリオバトルを開催した。そこから、ビブリオバトルに関心を持つ一般の方たちとの繋がりが生まれ、一緒に「ビブリオバトル北海道」という団体を結成した。札幌エルプラザや書店のイベントスペース、夜遅くの飲食店、早朝のカフェなどいろいろなところで大小のイベントを開催した。メンバーは会社員、学生、公的機関の人など多種多様であったが基本的に本が好きな人達なのでユニークな面白い書店があると聞くと皆で出かけて行ったりもした。今でも何人かとはFacebookの友達で近況を聞くことができる。

次に北大図書館が力を入れている障害のある学生のための修学支援の始まりにも関わった。北大の先生から障害のある学生の声を聞いてほしいという依頼があり、その先生や学生を交えて「修学支援懇話会」を月一回開催した。学生からはiPadで図書館の本を読みたいという要望があり、紙の本を読むことが困難な学生のための書籍の電子化が主なテーマとなった。著作権法の制限規定(37条)やマラケシュ条約など改めて勉強してみると、図書館だからできることなので、その役割は最大限に活かす義務があると考えた。懇話会では、スキャンからテキスト化の過程でOCRでは判別できない文字をどうするかなど実際に電子化する上での技術的な課題が多く話題となり、電子化の過程を学ぶために電子書籍を製作する札幌市内の印刷会社を訪ね、懇話会に参加していただいたこともあった(この印刷会社は今でも懇話会に来ていただいているそうだ)。制度的な課題である学内での流れについては、学務系との協働で障害のある学生のための支援の仕組みを作ることができた¹⁾。当時このような支援を行って

いる大学は少なく、実績のある都内や関西の私大に情報交換もお願いした。今でも北大図書館はこの分野では先駆者のひとりであることが誇らしいし、またその数年後に読書バリアフリー法が制定されたことも実に喜ばしいことだった。今思うと、これらの活動ができたことは、札幌や北海道という土地が持つおおらかさや自由度に依存するところが大きかったかもしれない。他大学や公共図書館などの館種を超えた繋がりや広がりも北海道では印象深い経験だった。

次に北大の後に赴任した一橋大学在職時のことも思い出してみたい。一橋大学では着任早々当時の図書館長に「図書館は研究の中心ですから」と言われ、大学の心臓である図書館が本当に存在することに驚くとともに背筋が伸びる思いだったことを思い出す。由緒ある図書館で最初に起こったのが肖像画の転落事件であった。図書館には過去の教授陣等の肖像画がたくさん掲げてあった。しかし、肖像画は長年の間に埃やカビなど（鳩の糞害もあった）で劣化の一途をたどり、転落事件とともに危険防止と破損汚損防止のためにすべての肖像画を撤去して倉庫にしまうこととなった。ここから学内の美術史を専門とする先生とともに肖像画の修復とその展示室の設置のための運動が始まる。美術史の先生や図書館研究開発室の先生方、図書館職員とともに、他大学の大学史展示室を訪問調査して、一橋ほどの歴史を誇る大学であれば大学史展示室のような施設が必要であることを訴えた報告書を作成し、大学上層部に上申した。結局、当時の上層部の方針により展示室の設置はならなかったが、同窓会組織である如水会からの援助をいただいでいくつかの肖像画は修復することができた。特に劣化が激しかった福田徳三博士の肖像画が蘇ったことは忘れることはできない²⁾。これが一橋時代の最初の1、2年のことである。この経験に継続する形で後半の3年余りは、一橋が世界に誇る

メンガー文庫等を所蔵する社会科学古典資料センターの保存・修復事業の維持と保存人材の育成に奔走することとなる。全国の大学図書館等の職員に古典資料センター教員の知識や修復工房スタッフの技術を学んでもらうため「西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」という長期の実務研修事業を実施することとなった³⁾。この事業の2年の実施期間の間に、資料保存を重視する大学や国立国会図書館の図書館職員9名が研修を受けてくれた。この受講生たちが地域の拠点となり一橋のスタッフと共に「ほぞんネット」なる枠組みを作り、今でも情報交換を続けてくれていることは本当に嬉しく思っている。

振り返ってみると、確かに一貫性はない。良く言えばその大学や地域の特性を活かした活動に関心を持ってやってきたと言えるかもしれない。ただ、今思うと、自分の中に図書館の枠を広げたい、超えたいという気持ちが無意識にあったような気がする。図書館も図書館職員も館（やかた）の中に納まるものに非ず。それぞれの大学の特色や環境の中で図書館の可能性を見だしボーダーを広げてみることをお勧めしたい。紙数が尽きたが、最後にこれらの活動を共に行った上司、同僚、関係者の皆様に感謝を申し上げる。

- 1) 特別修学支援室と連携して行う、障害のある学生へのサービス 北海道大学附属図書館の事例. 小林 泰名, 栗田 とも子, 河野 由香里. 「大学図書館研究」2018年108巻 論文ID: 1714
<https://doi.org/10.20722/jcul.1714>
- 2) 一橋大学附属図書館における肖像画コレクションのクリーニングについて. 長名 大地. 「一橋大学附属図書館研究開発室年報」06号 (2018)
<https://doi.org/10.15057/29418>
- 3) 西洋古典資料保存に関する拠点およびネッ

トワーク形成事業. 鈴木 宏子. 「大学図書館研究」2020年 114巻 論文ID: 2058
<https://doi.org/10.20722/jcul.2058>

(すずき・ひろこ／千葉大学附属図書館
hirokosuz@gmail.com)

図書館利用者から図書館職員へ ある大学図書館員の回想

小山 莊太郎

はじめに

最近NACSIS-CAT/ILLの再編や電子資料の一層の拡充、オープンアクセスや研究データ管理などの新たな課題を巡って、大学図書館のコミュニティの在り方自体が問われる機会が多い。

共同体が個の結びつきによって成立する際には、前提として背景や関心の相互の共有が欠かせないと思われるが、意外にこの前提としての背景の共有は必ずしも十分ではないことが多いように感じている。大図研のような個人加入の研究会の面白さの一つには、各個人の背景についても活動を通じて自然と共有できるという側面があるように思う。

個人の背景には、担当業務や職歴に限らない様々な経験が含まれており、今回の特集が敢えて個々の担当業務や組織としての取り組みを対象外として個人に注目している意図とも通底していると思われる。

「足跡」という語が含まれているように、これまでの軌跡は一直線ではないどころか、恐らく足踏みも遠回りも含む迂遠なものではあるけれども、過去の経験が現在の図書館員としての関心にどのように結びついているかを試みに振り返ってみたい。

図書館を使い始めた頃

通っていた市立小学校は明治初期に創立さ

れた古い歴史を持つ学校ではあったけれども、高度経済成長期に宅地開発が進み周辺に続々と新設校が置かれる中で、田畑の多い農村地帯に所在したこともあって次第に児童数が減り、私の学年は1クラスだけで卒業までを全員が同じクラスで過ごすという、大都市の市立小学校ではなかなか珍しい存在になっていた。この小学校での経験も、農村と都市との比較、地域の中での学校や図書館などの地域社会を巡る関心につながっているところはあるように思う。

ちょうど在学中に、学級数の減少に伴って空き教室が豊富だったこともあってか、その内の1つを改装して教室の近くに新しい図書室兼多目的室が設置された。この新しい図書室は木目調の綺麗な床と用具の一室ではあったけれども、集会利用が重視されて書架は壁際のみで、新規の蔵書が中心で以前の図書室に置かれたままの旧来の蔵書の大半は自然と貸出対象から外れることになってしまった。図書館の改修移転については、実はその後非常勤職員として初めて大学図書館に雇用されたのも改修工事に伴う引っ越し作業と臨時の夜間閉館作業の要員としてであったのだけでも、図書館というものは蔵書も含めて移転していくものであるという感覚は意外に昔から有していたのかもしれない。

小学生の頃から市立図書館の分館も利用しており、シャーロック・ホームズシリーズを一応全巻読み通したり、一般書のコーナーで西村京太郎のトラベルミステリーを借りたりしていた。1990年代後半の時点では未だインターネット利用によるOPAC検索は導入されておらず、タッチパネル式の専用端末で検索結果一覧の時間の掛かる画面切り替わりを眺めていたのもこの時期だった。今にして振り返れば、インターネットの普及初期までの図書館を経験した最後のアナログ世代とも言えるだろうか、カード目録からウェブサービスまでの変遷の歴史を利用者として現場で

経験したことになり、これもまた図書館での情報検索の方法は変容していく、ということ的前提とする感覚につながっているようにも思う。

ホームズシリーズを読み終えた頃、巻末の解説で言及されていて興味が出た、ジャック・トレイシー編『シャーロック・ホームズ事典』（確かバシフィカ、1980年の新装版だったと思う）を他館から取り寄せて読んだ。多分これが最初のILL経験であり、市が各区一館の方針を取っていたこともあって、区の人口増加が続いていてもなかなか図書館の設備や資料自体の増強は行われない中で、市内の他の図書館にもかなりの量の利用できる資料があるということに気付いてからは、相互貸借の黄色い申請用紙に記入してあれこれ取り寄せをするようになっていった。ILLや図書館ネットワーク、相互協力といった分野への関心は、やはり多分にこの時期からの利用者としての経験に基づくところが大きいと感じている。

原点 図書館司書との出会い

前述の小学校には図書館に職員が配置されていなかったのに対し、中学校と高校の学校図書館にはどちらも専任の司書が配置されており、特に中学校の司書の方には初めて身近に接した図書館職員としてとてもお世話になり、図書館サービスの良さを随分と享受することが出来て、それだけに強い印象を受けた。詳しくは村上恭子『学校図書館に司書がいたら』少年写真新聞社、2014年をご参照いただけると幸いだけれども、授業連携等と共に日常的な個別の生徒の利用がとても自由かつ身近なものであったことと、「成長する有機体」というランガナータンの理念を実感できるだけの、日々図書館が変わっていく、それも変わることを自体を目的とするのではなく、図書館サービスをより良くしていく為に常に不断の実践が積み重ねられていくこと、それ

らを利用者として内側から経験できたように思う。当時の白黒の図書館だよりには、パソコンにより作成された本文記事の上下左右の余白に手書きで編集後記的なコメントが付け加えられて印刷されており、その独特のレイアウトや工夫が懐かしい。

図書委員を務めたのは1期だけだったけれども、当時既にこの中学校には図書館システムが導入されていたので、バーコードリーダーによる貸出・返却作業や、未だバーコードの貼られていない図書の本棚などの実務は随分行ったように思う。図書館システムの画面で初めて見た「叢書」という語の意味を尋ねたりもしたし、図書委員による選書ツアーで小売とは異なる取次を訪問する機会もあった。

黒板に向かって哲学を学ぶ日々が黒板を背に哲学を講義する日々が変わっただけだったと人生を述懐したのは西田幾多郎だっただろうか、勿論現在の大学図書館での業務は必ずしも学校図書館の業務と同一ではないけれども、図書館に入り浸っていた中学生時代と現在の大学図書館で働く生活との変わるところのなさを感じる時もある。同じ図書館司書の先輩として、自分が接した司書の方の仕事ぶりには遥かに及んでいないことを感じつつも、少しでも自分がかつて接した図書館の世界を支えて広げることに参加できれば、という意識はやはり今大学図書館での仕事への姿勢の原点となっているように思う。

おわりに

その後高校・大学の時期には図書館員となる選択肢は余り意識することがなく、更に色々な形で図書館を利用していくことになるけれども、この時期の経験もまた地域間での図書館サービスの比較やMLA連携、書店や古本屋への視点など、やはり現在の図書館員としての関心にそれぞれつながっている。

入職以前、それもごく初期の一時期の振り

返りに終始してしまったけれども、それだけ過去の古い経験も思いのほか現在の背景を形成しているということなのかもしれない。

(こやま・そうたろう／

三重大学医学・病院管理部学務課図書係)

司書を勤めて十年強 ～モチベーションをイノベーション～

石立 裕子

1. はじめに

図書館での職歴にアルバイトを含めるなら、私の図書館員人生は学生時代に大学近くの公共図書館に勤めたところから始まる。いわゆる「司書」になるために進学した大学だったので、アルバイトをするなら絶対に公共図書館！と決めていた。当時の私にとって「図書館」とは公共図書館であり、それ以外の館種があることすら知らなかった。子供相手に読み聞かせをしたり、レファレンスに対応したりする「司書」になるのが夢だった。現在の職場への入職が決まった時、図書館で働くことのできる未来に期待と喜びを感じる一方、ほんの一握りの諦念をいだいていた。思い描いていた「司書」にはなれないだろうと思ったからである。しかし現在、私は大学図書館員として日々充実した時間を過ごしている。今回はそんな人間の大学図書館員人生の足跡について紹介させていただきたい。

2. 下っ端時代～事務室の中心で指示内容の真意を考える～

ご縁があって私は現在の職場である帝京平成大学に入職し、千葉キャンパス図書館に配属された。主な業務はカウンター業務、雑誌の登録、その他諸々であった。入職した当初は業務内容や蔵書構成、求められる知識や技術の違いに戸惑いを感じた。学生時代にアル

バイトしていた公共図書館では小説や実用書、雑誌、視聴覚資料等が書架に並び、貸出・返却処理や返却図書の配架、利用者からの質問や要求への対応が主な業務だった。ところが千葉キャンパスでの主たる業務は研究費での購入申請の受付や図書の受渡して、貸出・返却等の業務の割合は少なかった。当然書架に戻す図書も少ない。公共図書館で働いていたころは迷子本探しや配架が得意だったがここでは役に立ちそうもなく、意気消沈したのを覚えている。

入職した時期は図書館システム更改直後だったため、データが遺漏なく新システムに移行しているかの確認作業も担当していたが、その際に認識のズレにより非常に怒られたことがあった。アルバイトをしていた公共図書館では専ら装備・書誌データ付き納品だったため、「書誌が完全ではない」可能性を無意識に排除していたのだ。先輩が私の検索が不十分であることに気づき、改めて何に気を付けて検索すればよいのかを教えてもらい最初から作業をやり直した。図書館に限らず、どこにでもローカルルール等はある。何かを行うときは作業員内で認識を共有し何を目的とし何を達成目標としているかを確認することが大事だと改めて学んだ。

そんな学びを得ながら日々過ごすうちに、利用者に対しても段々と愛着が湧いてきた。千葉キャンパスに所属する学生は皆、医療従事者を目指している。学生たちの学習環境を充実させることがひいては日本の医療・社会福祉に貢献することだと思うと日々の業務にも自然と力が入る。大学図書館員もやりがいのある職業だと思うようになっていった。

3. ツートップ時代～嫌われない勇気～

そんなこんなで2年目を迎え日常業務にも慣れてきたころ、池袋キャンパスへの異動が決まった。あれこれやりたいことを考えていた矢先だったので、幾分がっかりしたことを

覚えている。しかしこれも転機ととらえ、異動までの期間は引越しや引継ぎで忙しくしつつ、池袋では何が求められ何をしたいのかを考え、3月下旬には気合十分であった。

異動した当初、驚いたのは千葉キャンパスと池袋キャンパスでの学生の違いだ。学科構成はほぼ同じで池袋キャンパスの学生も須らく医療従事者を目指しているのを見た目が華やかでおしゃれな学生が目立った。地方の大学でろくに化粧もおしゃれもせずにごろごろしてきた自分からすると軽いカルチャーショックだった。「学生の本分とは！」等と堅苦しいことで悶々とし、仕事に対するモチベーションも降下しかけたが、勉学に励む学生をみていると「そんなの関係ない！」と応援したい気持ちがまたむくむく盛り返してきた。

千葉キャンパス時代は指示に従って業務をこなせばよかったが、池袋キャンパスではパートタイマーの方々に指示を出したり、図書館運営について上司に当たるチームリーダーと相談したり、自分の仕事は自分の裁量でこなすことを求められるようになった。私の意見でもとりあえずは聴いてもらったので、運営や業務に対しても積極的に意見や提案をするようになった。そうしてますます業務が楽しくなっていた。

ただ、口から先に生まれてきたような性分なので抑えるところは抑えないと人間関係に影響を及ぼす。自分に主張したいことがあるように相手にも意見があるし立場もある。それぞれの考えや状況等を加味して、理想に近づける努力と持続可能な妥協点をみつけることが肝要であると学んだ。

4. 専任職員1名時代～契約と情熱のあいだ～

入職して3年が過ぎ、正職員として雇用されることになった。ツートップ時代も2年目を終えようとしている中、「正職員として色々挑戦していくぞ！」と大学図書館員人生最高潮のボルテージで医図協や看図協、そしても

ちろん大図研等に次々入会し、大学図書館員道を極めていく決意を新たにした3月中旬、中野キャンパスへの異動が告げられた。モチベーションは地面すれすれまで降下。中野キャンパスは完全業務委託体制のため、カウンターや図書・雑誌の登録等のいわゆる「司書」的な業務はないのである。

しかし専任職員は1名のため、自動的に部署内トップとなった。自分の意志を図書館運営に反映しやすい立場だ。運営を一手に任されたのだと自認し、今まで以上に視野を広げて利用者にも大学にも寄り添った図書館運営に邁進すればよいのだ。そう思い定めて最初におち当たったのが契約という壁だった。

業務委託は前年度中に仕様書を双方で確認し、業務内容に練引きをする。もちろん突発的に契約外の業務が発生し、且つ職員では対応が難しい場合はお願いできることもあるが、基本的には契約期間中に新しいことを提案したり内容の更新をお願いしたりすることは難しい。それでもコツコツ信頼関係を築いてきた結果、現在では提案や相談の持ち掛け方もわかってきたので、こちらの意思を図書館運営に反映しやすくなってきた。

毎年様々な点に焦点を当てて更新・改善しているつもりだが、世相も変われば利用者も変わる。よりよい図書館運営に終わりはない。これからも業務委託と二人三脚、よい関係を築きながら利用者や大学のために粉骨砕身していきたい。

5. おわりに

ここまで自分の大学図書館員人生を振り返ってみると、常にやりがいを感じることでできる大学図書館員という職業につけた私は本当に幸せ者だと思う。現状に甘んじず、利用者にとっても大学にとっても社会にとってもよりよい図書館運営を目指して今後も努めていきたい。

最後に、今回この記事を書くことを快諾し

てくれた職場の上司に感謝の意を表したい。

(いしだて・ひろこ／帝京平成大学中野キャンパスメディアライブラリーセンター)

ジェネラリストの卵の遍歴

吉田 弥生

2006年に大阪大学附属図書館へ入社し、まもなく丸17年になります。2～3年で異動を繰り返し、閲覧、図書受入、目録、サービス（他大学へ出向）、学習支援を経て閲覧に戻った後、現在は雑誌・電子資料担当となりもうじき2年半になるところです。一個人の職歴の振り返りにすぎない文章で恐縮ですが、大規模国立大学図書館のいわゆるジェネラリストコースを歩む一人の図書館員の記録ということで、どうかご容赦ください。

大学図書館職員になる前

大学卒業後は現所属とは異なる大学で働いていました。就職氷河期でなかなか就職先が決まらず、ようやく得た期限付きの職でした。はじめの3年間は教員の補助、次に補助金事業を2年担当しましたが、教員との距離が近い環境で教育や研究の現場を垣間見られたこと、事務系職員の方々から仕事を教われたことは、その後大学で働き続ける上で貴重な経験でした。また、学びたい学生がいてそれに応える教員がいる、そんな大学という場で今後も働きたい、小さな頃から親しみ母校でも好きな場所だった図書館で働いてみたいという2つの気持ちが合わさって大学図書館職員を目指す動機が生まれ、働きながら3回チャレンジし、何とか大阪大学に採用してもらうことができました。

大学図書館職員になる

晴れて大学図書館職員となることができ、

中央館の閲覧担当に配属されました。母校の図書館は閲覧室がワンフロアと小規模だったので、延べ面積約1.9万㎡の4棟構成、蔵書約120万冊、来館者数も非常に多い図書館を前にして圧倒されるとともに、その大きさゆえか、それまで知っていた図書館とは違いなぜか冷たく寂しげな印象を受けたことを覚えています。

働き始めて驚いたのは、専門職のイメージをもって入ったものの、実際の業務は非常に多岐にわたっていることでした。

閲覧担当の3年間では、学務情報システムとの連携、大阪外国語大学との統合、耐震改修工事とラーニング・コモンズ新設準備など、なかなか巡り合わないような事案に関わる機会を得ました。カウンター業務で約半日、残りの時間でバックヤード作業、事務全般、施設営繕などに対応する傍らでしたので残業も多く多忙でしたが、同僚と意気投合してホームページの改善に着手するなど、何かに駆られるように働いていました。しかし一方で、足元の中央館はというと、書架は手入れが行き届かず、資料の配置は使いづらく、館内は迷路のよう…。はじめに感じた冷たさの原因のようなものが見えてきて、上司とも何とかしたいと話していたものの、余力がなく手がつけられないままで心残りでした。

出向

その後は図書受入担当を3年務め、次に外国学図書館での目録担当に異動しました。多言語資料を扱う図書館で働けることに心躍り、ビルマ語などを担当、翌年はアラビア語だと張り切っていたところ、3年目を迎える前に思いがけず係長に昇任して和歌山大学に2年間出向することになりました。

当時の和歌山大学図書館は館長の主導で「改革」が進む傍ら書庫に甚大な虫害・カビ害が発生し、たいへんな状況でした。新棟増設、院生スタッフによる学習支援開始に着手

する一方、職員総出での地道な作業も盛りだくさん。目の回るような毎日でしたが、理念を示しながらためらいなく実行に移す上司の方々のけん引力、失敗してもよいから挑戦をという館長の後押しもあり、職員たちの手でたしかに図書館を変えていけるのだという実感を職員それぞれが得られていた気がします。最も嬉しかったのは、他部署の職員から「図書館もカウンターの職員の顔も明るくなった」と言葉をかけてもらったことです。また個人的には、未経験だったILLや参考調査業務に携われたこともありがたかったです。

ふたたびスタート地点へ

出向から戻ると初任地の図書館に配属となり、2年半は学習支援を担当、続く2年は新任当初の閲覧担当に戻りました。

4年のブランクを経て戻った図書館は入口階全体がコモンズに作り変えられ賑わいを増していました。一方、コモンズが学生の単なるたまり場となっている感があり、それも決して悪いわけではないのですが、院生サポーターによる学習相談の利用が少ない実態もあって、場・資料・人的支援の3要素を活用するラーニング・コモンズのコンセプトが実現されているかという心もとない感じでした。

幸い上司が学習支援に関心の高い方だったため、そこから初年次教育やFDを担当する教員陣とのつながりが生まれ院生スタッフの研修をお願いし、スタディスキルセミナーやライティング支援の展開につながりました。また、院生スタッフと若手職員のアイデアや教員からのアドバイスも取り入れて工夫するうち学習相談件数も伸びていきました。試行錯誤の連続でしたが協働することで生まれるパワーは大学ならではの醍醐味だと思います。

それから閲覧に戻り、昔の宿題に取り組む

チャンスが到来しました。前任者たちの手によって以前よりも血の通うようになっていた図書館で、さらに何ができると考えた時に思い出したのは和歌山大学の館長から伺ったイギリス University of Warwick Library のことでした。館内のサインが非常にわかりやすく初めて訪れた人でも迷わずに目的のものに辿りつける工夫がされていた、自らの力で使いこなせることで利用者は自信を与えられ図書館に歓迎されていると感じられるのだ、というお話（筆者の記憶が正確ではないかもしれませんが）が非常に印象的だったので、館内サインの改善に取り組むことにしました。それから資料配置、家具にも多少手を入れることができましたが、最後の半年間はコロナ禍に見舞われタイムオーバー、宿題はまたもや積み残しとなりました。けれども、色々な職員がバトンをつなぎながら新しい視点や方法で図書館をよりよくしていく、その形がよいと思っています。

現在、そしてこれから

その後雑誌・電子資料担当に異動し早2年半近くになります。経理系のことは図書受入担当時代の知識を引っ張ってこられたものあとは完全な初心者で、1年経過した頃からやっと地に足がつきピントが合ってきた感があります。転換契約の検討や円安・エネルギー価格高騰による財政難など次々と課題が押し寄せていますが、得難い機会に巡り合えているのだと前向きな気持ちが時々顔を出してくれるようにもなりました。せめて3年間は続けて経験を積みたいと願っていますが、はたしてどうなることやら…。

こうして振り返ってみると、さまざまな部署を経験するのは行く先々でアイテムを獲得しながら進んでいくゲームに似ているなと思います。つい取り上げやすいエピソードを中心に書いてしまいましたが、失敗は数知れず、中には10年以上経っても後悔し続けている

大学の図書館 第42巻第2号 (No.591) 2023年2月25日 (毎月25日発行) ISSN : 0286-6854
編集・発行 : 大学図書館研究会 年間予約購読料 : 送料共6,000円

□大学図書館研究会出版部 (出版物購入・問い合わせ窓口)

〒195-8585 東京都町田市金井ヶ丘5-1-1 和光大学図書・情報館気付

Fax : (044) 989-2250 E-mail : shuppan@daitoken.com

<出版物購入代金等振込先> ゆうちょ銀行 振替口座 : 00140-6-482205 大学図書館研究会出版部
三菱UFJ銀行 越谷駅前支店 普通口座 : 1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局

〒305-8550 茨城県つくば市春日1-2 筑波大学図書館情報メディア系 呑海研究室気付

E-mail : dtk_office@daitoken.com

<会費振込先> ゆうちょ銀行 振替口座 : 00190-2-79769 大学図書館研究会

こともあります。ですが、それらも自分を構成する重要な要素です。そして、行き詰った時にいつも私を助けてくれたのは、ここには書ききれなかったものも含め、先々で人からいただいた言葉たちで、それらはいつも最強のアイテムでした。これからも周りに感謝し

ながら協力して仕事を続けていけたらと思っています。

(よしだ・やよい／大阪大学附属図書館)

『大学図書館研究会誌』の発行と投稿受付のお知らせ

次号発行のお知らせ

次号、第48号の『大学図書館研究会誌』の発行は、2023年8月の予定です。
第48号から、冊子版の発行を終了し、電子版刊行後、即時オープンアクセスとなります。

投稿のお知らせとお願い

- ・『大学図書館研究会誌』は、現在、査読体制の整備中のため、「論文」の投稿の受付を停止しております。
- ・その他の、「書評(10,000字以内)」、「報告(15,000字以内)」、「資料紹介(1,600字以内)」の投稿の受付は引き続き行っております。
- ・前述の投稿のメ切は、2023年4月30日(日)です。

会員の皆様の報告、発表の場として、ご投稿をお待ちしております!

【お問合せ・投稿先】

大学図書館研究会誌編集委員会

E-mail: dtk-ks@daitoken.com